▶大学選手権準決勝・天理大戦で、持ち前の推進力を見せる箸本〈撮影者：上松凜助〉

4年連続全国4強 最後まで貫いた明スポ

箸本組の「前へ」

箸本主将「明大は自分を成長させてくれた」

――明大での4年間について

「明大は自分を成長させてくれた場所です。同期に恵まれて、4年間やれたことが一番うれしかったです。明大という組織の中でラグビーをやらせてもらえて、人間的に成長することができたので感謝の気持ちでいっぱいです」

――主将を経験して

「シーズンが始まった時は活動中止期間もあり、主将を務めることにプレッシャーは感じていませんでした。しかし、やりながら大変なこと、つらいことがたくさん出てきました。主将はやっぱり大変だと感じて、難しさを痛感した1年になりました」

――今後の目標は

「まずトップリーグに1年目から出ることです。1年目から出られないと自分の中で日本代表は厳しいと感じているので、まずステップアップの一歩目がそこだと思っています。この先、壁にぶつかるし、いろいろな課題や伸ばすべきところが見つかると思いますが、成長し続けたいと思います」

他選手コメントはこちら▶

	◯明大出場選手◯		
FW	中　村	②	国学院栃木
	田　森	③	長崎北陽台
	大　賀	②	報徳学園
	片　倉	④	明大中野
	髙　橋	④	桐蔭学園
	福　田	③	国学院栃木
	繁　松	④	札幌山の手
	箸　本	④	東福岡
HB	飯　沼	③	日川
	森	④	東福岡
BK	石　田	②	常翔学園
	廣　瀬	①	東福岡
	児　玉	③	秋田工
	石　川	④	報徳学園
	雲　山	③	報徳学園
R	紀　伊	②	桐蔭学園
	山本耕	③	桐蔭学園
	村　上	③	法政二
	山本嶺	①	京都成章
	山本龍	④	桐蔭学園
	齊藤誉	②	桐生一
	齊藤大	④	桐蔭学園
	松本純	③	佐賀工

第57回全国大学選手権
◆準決勝 天理大戦（秩父宮ラグビー場）

	前	後	計
明大	5	10	15
天理大	19	22	41

無情にもノーサイドを告げるホーンが鳴り響く。歓喜に沸く漆黒のジャージーを尻目に紫紺の戦士たちは肩を落とした。4年連続の全国大学選手権決勝を懸けた大一番、相手は一昨年度同大会で優勝争いを繰り広げた天理大。開始3分で先制点を許すと、その後一度もリードを奪うことはできなかった。東西リーグ戦王者の直接対決は西の横綱に軍配。リベンジに燃える国立決勝を前に箸本組は姿を消した。

不屈の闘志

既に勝敗は決していた。終わってみれば15―41の惨敗。いくらあがいても届かない。それでも闘志を燃やし続けた。ペナルティーを獲得した後半39分、迷わず選択したのは1年間、ずっと強みにしてきたFWのスクラム。「絶対にターンオーバーする。このままでは終われない」（左ロック片倉康瑛・法4＝明大中野）。顔をくしゃくしゃにしながらも前へ、前へ。ノーサイドの瞬間まで、死力を尽くした。

試合終了後、両雄の健闘をたたえる温かい拍手が会場を包み込んだ。「あともう1試合戦いたかった」（スタンドオフ森勇登・政経4＝東福岡）。電光掲示板を見つめやるせなさが漂う一同。そんなピッチ上には誰よりも早く整列に駆け寄る主将の姿があった。「応援してくれた方々に落ち込んだ姿を見せたくなかった」（ナンバーエイト箸本龍雅主将・商4＝東福岡）。闘将は一切の涙も見せず、毅然（きぜん）とした姿で会場を後にした。「全員が楽しかったと思える1年に」。シーズン始動時に語ったそんな言葉を体現するかのように、ピッチ上では最後まで〝らしさ〟を貫き通した。

後半39分、敗北確実で選択 魂のスクラム

一時半壊も

激動の中迎えたシーズン。例年チームの土台をつくる春季は、活動中止を余儀なくされた。部員の半数以上が帰郷し、チームは一時解散に。「個人がチームのために何をすべきか」（箸本）。モチベーションの維持に苦心しながらも、選手一人一人がスローガン〝One by One〟と向き合った。

10月に対抗戦が無事開幕すると、順風満帆に無傷の3連勝を飾る。第4節では慶大に1点差で苦杯を喫したが、次節・帝京大戦では課題の修正力を克服し39―23。3年連続の優勝決定戦となった伝統の明早戦も34―14で勝利を収め、22年ぶりの対抗戦連覇を果たした。

王系を継ぐ

「自分たちは次に向かって進むだけ」（スクラムハーフ飯沼蓮・営3＝日川）。箸本、山沢京平（政経4＝深谷）、片倉、森ら現4年生世代の跡を継ぐ〝箸本世代〟は1年次に準優勝すると、その後2年連続で決勝の舞台へ。入学前18年間、優勝争いから遠ざかっていた明大を常勝軍団に導いた。「常にチャンピオンシップを争えるチームに」（田中澄憲監督）。最後の最後に成し得なかった4年生の思いは、次の世代が確かに引き継いだ。日本一の飽くなき情熱で、史上最強のチームをつくり上げてみせる。

【髙智琉大朗】

1年次 準優勝

2年次 優勝

3年次 準優勝

4年次 ベスト4

関西王者・天理大に15―41 2年前の再現ならず

◯直近10年の大学選手権成績◯

回	年度	主将	成績
48	2011	溝口裕哉	2回戦敗退
49	2012	竹内健人	第2ステージ敗退
50	2013	圓生正義	第2ステージ敗退
51	2014	勝木来幸	第2ステージ敗退
52	2015	中村駿太	ベスト4
53	2016	桶谷宗汰	3回戦敗退
54	2017	古川　満	準優勝
55	2018	福田健太	優勝
56	2019	武井日向	準優勝
57	2020	箸本龍雅	ベスト4

明大スポーツ

2月11日　木曜日
令和3年（2021年）
第508号

明大スポーツ新聞
創刊　1953年
編集人　中野　拓土
東京都千代田区神田駿河台1の1
〒101-8301 TEL/FAX 03(3233)3760
http://meisupo.net/

香うどん丸香

ホイッスル

夜になると、途端に考えることが増えるといっても、ひだの少ない脳みそをくりくりと転がす程度。いつかの記憶を再生したり、不安の虫に奇襲を掛けられたり、気になる夜と朝のあいだ◆夢だった。今まで触れ、眺めてきたものは。退屈なことはなかった。記者の活動に限っても、何かに出会う都度心を打たれてばかり。たたき上げの苦労人が放った決勝ヘッドも、因縁のライバルをサドンデスで打ち破った優勝劇も、決して強くないチームで孤軍奮闘する主将の姿も。いつかの遠征取材で見たこと。夢破れて号泣する監督の姿に、胸の外側をぐいとえぐられた。書いて、消して、悩んで、また書いて。手ごわいダンジョンの攻略も、不思議と楽しかった。終盤戦が薄味だったのは、朝方の寝ぼけた時間帯だったから。そう捉えておこう◆さあ、そろそろ起きなければ。担ぎ続けたアラームを受け入れて。顔を洗って、歯を磨いて、お気に入りのコートを身にまとって。夢はうたかた。電車に乗れば、すうっと消えてしまうかもしれない。それでもいい。大切にしたいものは、しっかりフィルムに焼いたつもり

災禍の1年 乗り越えた

ゴール後は肘タッチで喜びを分かつサッカー部員

スポーツに全てを懸ける。それは特別な1年でも同じ。連載「real（リアル）」最終回では未曽有のシーズンの軌跡を追う。

「バラバラでも、みんなが日本一へ向け必死でやっているのは分かっている」。4月の活動自粛期間に入ってすぐの取材で、ラグビー部の松下主務（営4）は答えた。離れていてもチームの気持ちは常に一つ。迎えた全国大学選手権は結果こそ振るわなかったが、勝利を目指す姿勢には一点の曇りもなかった。

当たり前のありがたみを知った1年。須貝主将（商4）を中心にサッカー部が掲げたスローガンは〝繋翔〟。「（感染対策に）配慮した部分はあったが、練習の強度はこれまでと変えていない」。伝統である質の高い練習に妥協はなし。その姿勢が実ったか、関東大学1部リーグ戦では創部初の連覇を果たした。

いまだ大学スポーツ界は、ゴールの見えないトンネルから抜け出すことができていない。明大体育会の運営に当たるスポーツ振興事務室は「政府、都県の要請や明大の活動指針、ならびに各学連の決定に基づいて臨機応変に対応していく」とコメント。今後も制約の中で競技に向き合うことが予想される。しかし、トンネルの中が真っ暗かといえば、そうではない。46ある体育会全てが暗闇に明かりをともそうと、今できる形で1年を駆け抜けてきた。イレギュラーな今を、必ずや乗り越えてみせる。そんな強い意志が垣間見える1年に立ち会えた。【村川拓次】

RBM
Residence Building Management

▲22卒向けインターンシップ情報はこちら

不動産の総合プランナー

企業とワーカーの良きパートナーとして、
オフィスビルやレジデンスを通して、安全、快適、
そしてクリエイティブな環境づくりの実現を目指し、
RBMは日々挑戦を続けています。

レジデンス・ビルディングマネジメント株式会社

「感染しない」「感染させない」応援も応援だ。
明治大学連合父母会
会長　小林めぐみ

Mスポ 全力応援。

年間購読のお申し込みは 080-4083-5789
読み終えた新聞はお持ち帰りください

レイアウト　上松凜助